

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12994

研究課題名(和文)「空なる場所」としての共存空間 日欧現代演劇における「声」の演出美学

研究課題名(英文) The "Empty Place" in Coexistence Spaces. The Aesthetics and Politics of Voices in Contemporary Theatre

研究代表者

針貝 真理子 (Harigai, Mariko)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：00793241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：政治哲学者C・ルフォールによると、王の身体が権力の場となる時代が終わった後、民主主義における権力の場は「空なる場所」となった。本研究は、現代演劇における「声」が人々のあいだに生成する聴覚的共存空間に着目し、そこに「空なる場所」のあらわれを見出すことで、「声」という現象における美学的観点と政治哲学的観点の接続を行った。具体的には、集団で発声するコロス(合唱)が重要な位置を占める近年の上演例を複数取り上げ、そのコロスが舞台上の個人や観客席の人々と取り結ぶ関係を明らかにした。そこからは、「空なる場所」に集う個人を同一化することなく、むしろその差異を知覚可能にする声のあり方が重要であることが窺える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

常に日常生活の根底にありながらもそこに可視化されることのない「声」の政治性を、非日常的で特異な「声」を聴かせる現代演劇の例を手掛かりに解明し、それを通して、現在制度化されている民主主義の概念に新たな角度から光をあてた。またその際、あいだの現象としての「声」を手がかりに政治哲学的観点と美学的観点を接続し、これまで曖昧な比喻として捉えられることが多かった政治の「声」を、身体をそなえた具体的な現象として捉え直した。

研究成果の概要(英文)：According to the political philosopher C. Lefort, after the king, whose body represented the center of political power, was beheaded in the French Revolution, the place of power in democracy became "empty." My research combined an aesthetic perspective and a political-philosophical one through an analysis of voices in contemporary theatre which form spaces acoustically shared among speakers/singers and listeners. In such spaces, the manifestation of a political "empty place" can be found. To this end, exemplary performance were engaged in which the collective voicing of the chorus plays an important role and the relationships within the chorus, as well as the relationships between the chorus, each individual on stage, and the audience, were analysed. A central finding is that the voices truly relevant to democracy do not unite the individuals who are gathered in the "empty place", but rather make the differences between them perceptible.

研究分野：演劇学

キーワード：演劇学 声 民主主義 ポストドラマ演劇 コロス ルネ・ポレシュ クリストフ・マルターラー ドイツ演劇

### 1. 研究開始当初の背景

本研究課題の背景にあったのは、戯曲の忠実な再現、ひいては戯曲に登場する人物の再現表象をめざす西洋近代演劇への反省から、演劇独自の表現をめざして現代演劇において多様に発達した、再現表象とは距離を置く「声」の実践と美学である。とりわけ、2000年代以降のドイツ語圏には、そうした声を分析対象とする新しい「声」研究の著しい発展が見られる [Hg. Kolesch / Krämer: *Stimme*, 2003 他]。それら「声」研究に共通する傾向は、「声」をロゴスと同一視せず、「声」という現象自体を扱おうとする点である。西欧では、キリスト教およびユダヤ教の伝統から「声」は神のロゴスと同一視されることによって特別視され、それによって動物とは異なる人間の権利が裏付けられていた。西洋諸語に見られる「声 = 票 (羅 vox, 仏 voix, 独 Stimme)」という用法も、ロゴスと声との同一視から発したものである。ロゴスの優越と「声」のロゴス化は、教会の権威が失墜し、世俗化が進んだ近代以降も引き継がれ、ロゴス化された声による音声言語中心主義へのデリダの批判を招くことになる。そこで、ロゴスと同一視されない「声」本来の性質に迫ろうとしたのが、近年ドイツ語圏で発展した「声」研究であった。ここで「声」は身体のはかない痕跡として捉えられ、言葉の担い手として機能するのみならず、そのつど聴く者の欲動を喚起し、倫理的要請を行う「呼びかけ (Appell)」として、言語外の効力をも有していると指摘された。「声」は、発し手と聴き手との、言語と身体との、在と不在とのあいだ (zwischen) を流動的に漂う現象として捉えられるようになる。そこから、空間的現象としての「声」に関する研究も進んだ [Hg. Kolesch / Pinto / Schrödl: *Stimm-Welten*, 2009, Harigai: *Ortlose Stimmen*, 2017 他]。

しかし、「声」空間の持つ政治性についての考察はまだ十分とは言えなかった。以上のように、「声」は最新の演劇美学的文脈において、人物の「表象」に代わり「あいだの現象」として捉えられる傾向にあるが、政治哲学の分野においても近似した転回が見られる。フランスの政治哲学者 C・ルフォールは、民主主義の時代がフランス革命における王の断頭に始まるということ、つまり、民主主義政治における権力の場所とは、国家の代表者たる王の身体ではもはやあり得ず、国民誰もが権力の担い手であるがゆえに誰のものでもない「空なる場所 (lieu vide)」なのだと言及した。この「空なる場所」は、神や王のような外在的・超越的根拠を持たず、人民自らの内にしか存在しない。また、これは彼らのあいだでそのつど実践によって生じるものであるため、常に差異を含み、一なる全体に統括することができず、未規定的である。これらの特徴は、「声」の空間と著しく共通している。

### 2. 研究の目的

本研究が企図するのは、特定の代表者の「身体」ではなく、各々の身体の痕跡として、それらのあいだに共存空間を開く「声」と「空なる場所」との関係性を考察することで、従来の「声」に見出されていた政治家像中心の政治観を共存空間中心のものへと転換することである。ロゴスとは同一視されない現象としての「声」が生成する共存空間には、ロゴスを持たず、民主主義の制度からこぼれ落ちるサルタンの存在も含み込まれる。ここに聴かれるような「声」による共存空間こそが、誰しにも属し、それゆえに誰の占有物でもない「空なる場所」のモデルとなるのではないか。これが、この研究の核心をなす問いである。

本研究の目的は、以下の3点に集約することができる。

(1) 常に日常生活の根底にありながらもそこに可視化されることのない「声」の政治性を、非日常的で特異な「声」を聴かせる現代演劇の例を手掛かりに解明し、それを通して、現在制度化されている民主主義の概念に新たな角度から光をあてる。

(2) 近年では、演劇や音楽、映画のみならず、ダンスやパフォーマンス、インスタレーションなどの諸芸術においても重要な要素となっているにもかかわらず、これまでロゴスや話し手の人格と同一視されることで盲点となっていた「声」という現象について語るための分析的言語および思考体系を、「空間性」を分析視角として構築する。

(3) 西欧の上演例と日本の上演例を比較することによって、それぞれの「声」文化および「声」の歴史における差異を明らかにする。

### 3. 研究の方法

上述の目的を果たすため、本研究では、再現表象的演技観を脱した日欧現代演劇の中から、とりわけ「声」による聴覚空間の演出が際立っており、なおかつその演出スタイルが、難民問題や新自由主義による格差拡大、労働力の搾取や女性および LGBT への性的差別といった政治的問題への意識と強く結びついているものを取り上げ、その演出美学や作品の分析を中心に考察を進めていく。その範例として選出したのが、ドイツのルネ・ポレシュ (1962-)、スイスのクリストフ・マルターラー (1951-)、日本の三浦基 (1973-) という三人の演出家である。西欧の例として主にドイツ語圏のものを取り上げるのは、「パフォーマンス的なもの」や「ポストドラマ演劇」と名指される、再現表象を目的とする伝統的演劇観を問い直しつつ、演劇における政治性を革新する動きがここで顕著に見られるためである。

R・ポレシュは、B・ブレヒト(1898-1956)の提唱した「異化効果」およびH・ミュラー(1929-1995)の脱構築的作劇法を継承し、ポップカルチャーと社会学的、哲学的言説を巧みに編んだ演出スタイルで2000年代以降のドイツで絶大な支持を得た演出家である。ポレシュの取り組みを通して、異文化の影響を受けつつ西欧文化の内部から起こった西欧近代演劇の問い直しの歴史と、現代におけるその政治性の意義を明らかにする。

C・マルターラーは音楽劇の分野で独自のスタイルを確立した演出家である。オペラや歌曲、民謡やポップソングを自在に組み合わせる舞台化し、その際に合唱隊による群像劇の形式を取るのが彼の作風の大きな特徴である。そうして共に歌うという行為から一種の共存空間が生じるのだが、それは往々にして皮肉な視点で異化され、社会的・政治的な問題を浮き彫りにする。彼の取り組みを通して、歌う「声」に特有の政治的空間の様相を明らかにする。

三浦基は、主にチャーホフの演出を通して、新劇に連なる西洋近代演劇の再現表象的演技技術を疑問視し、劇団「地点」の俳優たちと共に独自の演技スタイルを築き上げた。とりわけ、強い音楽性を持つまでに洗練された「声」のスタイルが特徴的である。近年の演出作品においては、劇団員それぞれの身体性を生かしたアンサンブル的な「声」が際立っており、そこに共存空間の現出を見ることが出来る。彼の取り組みを先述の二人と比較しながら分析することを通して、日本における西洋近代演劇の受容史を批判的にたどり、現在の日本における「声」の政治性の、ひとつの可能性を探る。

上記三名の演出は、主人公の心理を再現することによる内面描写ではなく、群衆の生み出す雰囲気を描きながら、個々の身体や観客各々の特異性を際立たせている。彼らのあいだに生じる空間の分析から、「声=票」の主体が生成される過程を明らかにすることを目指す。なお、演劇における声の空間性に着目するには、建築物などの固定した幾何学的空間よりも、上演においてそのつどパフォーマンスに生じる空間を問題にしなければならない。したがって、本研究では、聞かれることを通して声の影響を及ぼし、またみずから影響を受ける範囲を声の空間として、そこにいかなる影響関係が生じるかを具に観察していくことにする。

#### 4. 研究成果

R・ポレシュの演劇の分析からは、以下のような成果を得ることができた。近年のポレシュ演劇に特徴的なのが、コロスという古代ギリシャ演劇から続く西洋演劇の伝統を利用して、ひとつにまとまった複数の声を持つ集団の像を数多く描いていることである。本研究では、民衆・人民の声としてイメージされる集団的な声の演出に着目して分析を行った。まずその下準備として、2019年度には、演劇学者ゲラルト・ジークムントのポレシュ論を翻訳し、彼の演出が西洋近代的演劇形式のパロディとしてメタ的な演劇空間を生成していることを紹介して、ポレシュ演劇の基本路線の確認を行った。さらに本研究の分析対象としてコロスを用いた近年のポレシュ演劇の代表作とされる『キル・ユア・ダーリン』(2012)を取り上げ、古くからあるコロスという形式をパロディ的に用いた彼のメタ的演劇空間が、舞台と観客のあいだ、またポレシュ演劇の制作に関わる人々のあいだにある現実の社会的関係を浮き彫りにしていることを示した。それは「喜劇」的に示されることで現実と接続するが、観客と舞台が会うその場所もまた、演劇が示す「空なる場所」の一形態であると捉えることが可能である。この成果は、2019年の国際会議での発表「Mischen sich Kuenstler und Neoliberale? Frage nach der Liebe im Theaterstück Kill your Darlings von Rene Pollesch」で発表した。2023年度には、ポレシュ演劇にコロスが登場した最初期の舞台『コロス、ひどく道を誤る』(2009)を取り上げて詳細に分析した。そこでは、コロスの独自の演出によって、イデオロギー的言説が「公衆」に語りかける際に、否応なしに相手を一括りにしてしまうという言語の限界が露わにされ、また、声の吹き込みによって、誰もが既存の言説や声の引用によって発言している様子が描き出されている。ただし、ここでは単に言語の限界を露呈して冷笑的に振る舞うことが推奨されているのではなく、個々の身体を、言語からこぼれ落ちてもおそらくそこに存在するものとして知覚可能なものとするにこそ眼目が置かれていること、ポレシュ演劇が実践し続けてきたこととは、社会的に共有された通念の裏側に押し込められつつも、そこからずれ、こぼれ落ちる身体を繰り返し現れさせることであることが明らかになった。このように、ポレシュ演劇の声において前景化するのには、個々の脆弱な身体が存在であり、その存在を知覚可能なものにするによって、全体主義とも新自由主義的能力主義とも一線を画す集団および個人のあり方を提示していると言える。この成果は、2023年の雑誌論文「差異によって共にあること——ルネ・ポレシュの喜劇『コロス、ひどく道を誤る』に現れる身体的齟齬——」で発表された。

C・マルターラーの演劇の分析からは、以下のような成果を得ることができた。マルターラーの音楽劇では、原作に対する批判的態度を通して、音楽というメディアのもつ政治性が表面化される。本研究では、まず2020年度にシューベルトの連作歌曲《美しき水車小屋の娘》(ヴィルヘルム・ミュラーの抒情詩に基づく)をマルターラー演出で舞台化したもの(2001)を取り上げ、本作中に、ミュラーの抒情詩に見られる女性排除の構造と、シューベルトの音楽から導き出されたケアの倫理によって共存空間を築く可能性が示されていることを指摘した。抒情的男性主体によって物語世界から排除された女性たちは、独唱歌曲を複数の人々に歌わせるマルターラー演出において、みずから歌う主体として舞台上に登場し、排除の構造を解体する役割を演じる。ここで歌声は、抒情的主体の心情を歌うメディアから、ケアの媒体および、ジャン=

リュック・ナンシーの言う「無為の共同体」を媒介するメディアへと機能転換を遂げている。この成果は2020年に共著として刊行された書籍に収められた論文「罅割れる憧憬　クリストフ・マルターラー演出『美しき水車小屋の娘』における歌う主体の複数化と家父長制的文化への抵抗」で発表された。また、2021年度から2022年度にかけては、舞台上の俳優が戦後ドイツのオピニオンリーダーたちを演じた喜劇『ゼロ時あるいは奉仕の技術』(1995)を取り上げ、この舞台が代議制民主主義という政治形態のパロディとして「人民/国民」を代表するリーダー像を提示していることを示し、そのリーダー像を喜劇的・批判的に描きつつ観客自身の姿とも重ね合わせることで、政治に対する批判的な視点を観客に提供するのみならず、観客自身の自省を促していることを明らかにした。この成果は、2023年の口頭発表「代議制民主主義の感性的『技術』　クリストフ・マルターラー『ゼロ時あるいは奉仕の技術』における笑いと歌の共同体」および雑誌論文「代議制民主主義の感性的『技術』　クリストフ・マルターラー『ゼロ時あるいは奉仕の技術』における潜在的反省の集合体」にて発表された。

三浦基の演劇の分析からは、以下のような成果を得ることができた。三浦演出『プレヒト売り』(2016)の分析から、彼のプレヒト演出が、プレヒトの異化効果を活かした独自の音楽的音声演出によって、新自由主義経済への批判となっていることを明らかにした。そこで現代日本の政治を左右する「経済」は、特定の人物の顔を持たないものとして、「空なる場所」の一形態として現れると言えることがわかった。この成果は、2019年の国際会議での発表「Brecht zum Verkauf! Verfremdung musikalischen “Rauschgifts” in Brecht Sellen von Chiten」にて発表された。

さらに、当初の研究計画に明記していたわけではないが、上記の個別研究の前提を成す基礎的な研究として、以下の3点が挙げられる。

1)「声」論の先行研究を整理して、その発展の歴史を概観し、そのうえで、民主主義において未だ「票」として数えられない「声」を認識させる「声」のあり方と「声」にあらわれる異質な他者像を、ロバート・ウィルソン演出『ハムレットマシーン』の上演分析から導き出した。民主主義の基盤である「声を聴く」という行為は、他者を認識する行為に他ならないが、本研究ではとりわけ、異質な他者の声を聴くという行為がいかにして行われるかを示した。この行為は、戦争やパンデミックなどの災禍が続き、人々の分断が進む現在、より一層重要性を増していると言える。この成果は、2022年に論集として刊行された書籍に収録された論文「現代演劇と声の文化　言語と身体、在と不在のあいだ」および2021年の講演「『私は声である』　ドイツ演劇学から見る声の人間像」にて発表した。

2)共存空間という概念と深く関連し、ナンシーの共同体論にも多大な影響を及ぼした、ヴェルナー・ハーマッハーの「共存在」論「《共に》について/から離れて　ジャン＝リュック・ナンシーにおける複数の変異と沈黙」およびそれに対するナンシーの応答「私は言葉もない」を共訳し、2020年に翻訳および訳者解説を発表した。ハーマッハーは、独仏語圏においては現代思想の重要人物のひとりとみなされる論者であり、「ポストドラマ演劇」の概念構想にも多大な影響を与えているにもかかわらず、日本ではまだほとんど紹介が進んでいない。この翻訳は、日本の哲学・思想研究や演劇・文学研究にも広く貢献するものとなるだろう。

3)2020年に始まったパンデミックによって、対面を基本とする演劇という芸術形式は深刻な窮地に置かれた。その中で、今後の日本演劇界を担う新進気鋭の若手演劇人たちと議論を重ね、演劇という芸術形式の持つ美的・社会的・政治的意義についてあらためて意見を交わすとともに、彼らの舞台制作にも実際に関わって、これからの演劇のあり方を模索した。実践的な制作活動として挙げられるのが、実験的オーディオ演劇として制作された『公園』(2020)と『マミアニア』(2021)および東京藝術大学奏楽堂で上演された音楽劇『エグモント』(2021)の三作である。この実践活動の一端を示す刊行物が、2021年の書籍『つながれ!ベートーヴェン　コロナ禍に向き合いながら駆け抜けた、藝大・ベートーヴェン生誕250年記念イヤーの記録』に寄稿したエッセイである。これらの実践活動では、単に良質な作品を生み出すことを目指すのみならず、近年顕になっている制作現場でのハラスメントや差別の問題も省みながら、演劇制作の場に生じる共同体のあり方を根本から問い直し、より良い現場づくりを模索した。これからの日本演劇界への貢献を目指したこの営みは、本研究の基礎であると同時に根本的な目的でもある。ここでは、マルターラーやポレシュによる独自のチーム体制と制作方法についての知見が大いに役立った。

以上の研究成果によって、当初の研究計画で予定していた目的については、一定水準の達成を見ることができたと言えるだろう。

先述の目的(1)については、各論文および口頭発表における個別作品、とりわけコロス・合唱に着目した分析を通して実現することができた。

(2)については、聴覚空間を構成する「人と人のあいだの関係」が声をとおしてどのようにかたちづけられていたか、声という現象のなかに人々がどのように配置されていたか、「相手に影

響を及ぼすふるまい」としての声がどのように聞かれたかを記述することによって、個別の人物描写中心の分析に終始することなく、人と人とのあいだに生じる声の空間の分析を行うことができた。

(3) に関しては、演劇史の転換期ともなりうる未曾有の危機にあって、限られた期間での歴史記述および日欧演劇文化の比較は叶わなかったが、演劇制作現場との交流を通して、日欧演劇文化の橋渡しをすると同時に、今後の日本演劇の発展に貢献することができた。

ロックダウンの経験や戦争やパンデミックによる移動困難、経済危機などによって政治的・社会的分断が進行し、政治や社会の一員である個々人の姿が見えづらくなっている今、演劇の「声」を通して政治的な「声」を再考する必要は、ますます高まっているように思われる。そのような中で、今後は個々人の「声」の内部にあらわれる分断や矛盾も、よりいっそう注視しなければならない。また、空間的広がりを持ち、他の要素と常に重なり合いながら作用を及ぼしていく「声」の特質に鑑みるに、「声」と視覚的イメージなどの他要素との関連についても、より考察を深めていく必要があるだろう。さらに、個別の事例研究にとどまらない、より包括的な理論を確立し、それについてまとまった研究成果を残すことも今後の課題である。

このように、いくつかの課題が残ってはいるものの、あいだの現象としての「声」を手がかりに政治哲学的観点と美学的観点を接続し、これまで曖昧な比喻として捉えられることが多かった政治の「声」を、身体をそなえた具体的な現象として捉え直したことに、本研究最大の成果があると総括することができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 ヴェルナー・ハーマッハー / 針貝真理子（訳） / 西尾宇広（訳）	4. 巻 2
2. 論文標題 《共に》について / から離れて - ジャン＝リュック・ナンシーにおける複数の変異と沈黙	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多様体	6. 最初と最後の頁 273-337
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ジャン＝リュック・ナンシー / 針貝真理子（訳） / 西尾宇広（訳）	4. 巻 2
2. 論文標題 私は言葉もない	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多様体	6. 最初と最後の頁 347-353
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 針貝真理子	4. 巻 2
2. 論文標題 《共に》について / から離れて 訳者解題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多様体	6. 最初と最後の頁 338-346
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 針貝真理子（訳）、ゲラルト・ジークムント（著）	4. 巻 第59号
2. 論文標題 言語、身体、主体 喜劇と悲劇のはざまのルネ・ボレシュ演劇 [ゲラルト・ジークムント]	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』（慶應義塾大学出版会）	6. 最初と最後の頁 107-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 針貝真理子
2. 発表標題 Brecht zum Verkauf! Verfremdung musikalischen "Rauschgifts" in Brecht Seller von Chiten
3. 学会等名 16. International Brecht Society Symposium (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 針貝真理子
2. 発表標題 Mischen sich Kuenstler und Neoliberale? Frage nach der Liebe im Theaterstueck Kill your Darlings von Rene Pollesch
3. 学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 縄田 雄二	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 286
3. 書名 モノと媒体の人文学（担当章：現代演劇と 声 の文化 言語と身体、在と不在のあいだ）	

1. 著者名 東京藝術大学演奏藝術センター（企画・編集）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京藝術大学出版会	5. 総ページ数 95
3. 書名 つながれ！ベートーヴェン コロナ禍に向き合いながら駆け抜けた、藝大・ベートーヴェン生誕250年記念イヤーの記録	

1. 著者名 平田 栄一郎、針貝 真理子、北川 千香子（編著者）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 272
3. 書名 文化を問い直す（担当章：第七章 罅割れる憧憬ークリストフ・マルターラー演出《美しき水車小屋の娘》における歌う主体の複数化と家父長制的文化への抵抗）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------